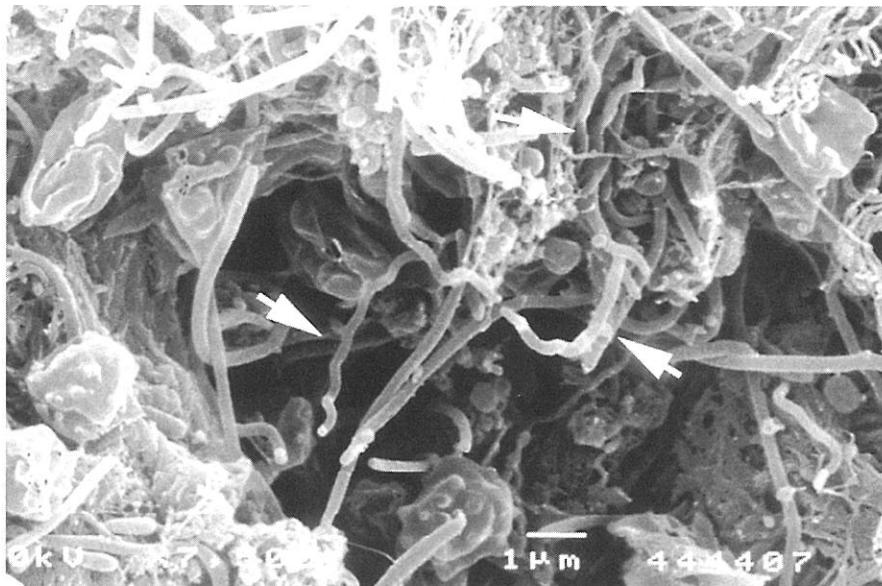


北海道支部会報

日本細菌学会北海道支部



目 次

表紙写真の説明

第71回日本細菌学会北海道支部学術総会開催にあたって	大山 徹 1
第70回日本細菌学会北海道支部学術総会を終えて	菊池 直哉 2
研究室紹介	北海道医療大学 馬場 久衛 3
	北海道工業大学 木村 浩一 5
職場紹介	北海道石狩家畜保健衛生所 中岡 祐司 7
平成14年度支部活動記録	 9
平成13年度支部会計報告	 10
平成14年度支部会計予算案	 11
平成15年度支部会計予算案	 12
支部会則	 13
支部会員名簿	 15
平成15年度支部役員・名誉会員名簿	 21
歴代支部長名		
編集後記		

表紙写真の説明

牛の趾乳頭腫症 (Papillomatous Digital Dermatitis, PDD) 病変部の電子顕微鏡写真

PDD は牛の蹄球上部に好発する限局性、表在性、滲出性ないしは増殖性の皮膚病変を呈する伝染性の蹄疾患である。病変部は暗赤色を呈し、疣状から乳頭腫状に隆起し、激しい疼痛を示す。病変部には多数のらせん状のトレポネーマが観察され、本症の原因菌である可能性が示唆されている。

第71回日本細菌学会北海道支部学術総会開催にあたって

東京農業大学生物産業学部 食品科学科 生物化学研究室
大 山 徹

第71回日本細菌学会北海道支部学術総会を本学のオホーツクキャンパスで開催するにあたり、本学の生物産業学部はもとより、網走市にとっても非常に名誉なことと思っております。道東では、初めての支部会でもあり、遠隔地の網走での開催には、多くの不安がありましたが、北海道支部の諸先生方のご支援を賜ることが出来ましたこと、および多くの先生方のお世話によって私どもの研究室の活動が可能になり、ささやかではありますが北海道支部細菌学会へ寄与をしたいと考え、お引き受けすることとなりました。大変微力ではありますが、私ども生物化学研究室のスタッフは、会員の皆様方の発表と学術総会が成功致しますように最大限の努力を払うつもりでおります。

現在、私どもの生物化学研究室では、ボツリヌス毒素複合体のタンパク質化学を主体とした研究を進めております。言うまでもなく、ボツリヌス研究は、昭和25年に北海道立衛生研究所の飯田広夫先生（後に北大医学部細菌学教室教授）が、本邦で初めてE型菌について報告して以来、道衛研、北大医学部、北大獣医学部、札幌医大の諸先生によって引き継がれ、北海道における伝統的な細菌学研究となっております。多くの研究成果の中で、当研究室の初代教授の井上勝弘先生は、道衛研時代に飯田弘先生とともにボツリヌスC型神経毒素遺伝子が溶原ファージにコードされていることを証明しました。その後、毒素遺伝子の研究を、砂川紘之先生、武士甲一先生とともに私もボツリヌス研究に携わったことが縁になり、オホーツクの地でも研究が引き継がれました。大変残念なことに、昨年9月に井上先生が逝去されました。謹んでご冥福をお祈り致しますとともに、私どものボツリヌス研究の行く末を見届けていただきたいと考えております。

本学部食品科学科の大部分の卒業生は、食品会社に就職しますが、最近の病原性大腸菌O-157、黄色ブドウ球菌などの大規模食中毒事件あるいはBSEなどにより、食品業界への消費者の不信が強まり、大きな影響を受けています。21世紀の現在、食に関する最大の関心は安全性にあると考えられ、とりわけ、食中毒細菌からいかに食品を守り、安全な食品を提供するかを教育・研究することが、本学の食品科学科の大きな目標の一つとなっており、そのためのカリキュラムの改正を行いました。道内の細菌学の研究者が集う細菌学会支部総会が本学部で開催されることは、食品科学科にとってより一層の食の安全性の展開のために大きな意義があり、大変期待しております。

学術総会が開催されるオホーツクキャンパスは、東に知床半島の山並みとオホーツク海、西には網走湖、能取湖、さらに南には斜里岳や阿寒の山々を眺望できる自然豊かな丘にあり、総会終了後は道内有数の景勝地を楽しんではいかがでしょうか。今回、キャンパス内で講演と懇親会を行い、特別講演では、本学の生物生産学科の桃木芳枝教授にお願いしてあり、懇親会でオホーツクの食を楽しんでいただきながら、東京農大の存在を皆様方に知っていただきたいと考え、多くの演題と参加をお願い申し上げます。

第70回日本細菌学会北海道支部学術総会を終えて、 そして北海道支部長へ

第70回日本細菌学会北海道支部学術総会会長

日本細菌学会北海道支部長

菊 池 直 哉

第70回日本細菌学会北海道支部学術総会は昨年10月26日酪農学園大学学生ホールにおいて開催され、無事終了しました。第68回本総会は東北支部との合同学術総会でしたので弘前へと一気に南下しましたが、69回は函館、そして徐々に北上し昨年は札幌を通過して江別で開催となりました。酪農学園大学で本総会が開催されたのはちょうど10年前であります。当時は一般的の講義室で行いましたが、今回は竣工間もない学生ホールで開催されました。

一般講演は午前9時30分より開始され、午前11題、午後11題、計22題の発表がありました。酪農学園大学で開催されたこともあり、これまでになく獣医学関連の演題が多く、7題の発表がありました。そのほか、医学関係が最も多く8題、歯学関係5題、水産関係2題でした。参加者は例年並みの50名でしたが、会場が広過ぎたせいでどうか、やや閑散としておりましたが、活発な質疑応答があり、会場は熱気に包まれておりました。

一般講演の最後に酪農学園大学酪農学部の岡本全弘教授より「家畜糞尿の嫌気的発酵による循環農法の追及」と題する特別講演がありました。現在、岡本教授を代表者として搾乳のロボット化、糞尿の嫌気的発酵によるメタンガス化とそれによる発電、糞尿スラリーの土への還元など、最先端の技術を駆使したハイテクリサーチが進行中であります。糞尿の嫌気的発酵によるメタンガス化とそれによる発電、糞尿スラリーの土への還元などにより究極の循環農法を目指したものであります。家畜から大量の糞尿が排出され、その結果、河川などの環境汚染につながり問題となっておりますので、その解決法として大いに期待されております。これまでとは異なった講演内容に、参加者の皆さんも大いに興味を示され、講演終了後、見学会も開催されました。

学術総会後は、新札幌にて懇親会が開催され、31名が出席しました。多いに飲み食なながらも、当日の発表内容、今後の研究方向など、活発に話され懇親を深めました。最後に、次回の網走での総会参加を確認し、本学術総会のすべての行事を終了しました。

本学術総会中に行われた支部総会で私が次期支部長に指名されました。学術総会を開催し一段落する間もなく、より大きな責任を負うことになりました。私より適任の方がおられると思いますが、前支部長の藤田先生のご教示と皆様のご協力を得て、これから2年間の責任を果たして行きたいと思っております。

活発な支部会活動のために、皆様のご意見をお寄せくださいますよう、一層のご協力をお願い申し上げます。

【研究室紹介】

北海道医療大学口腔細菌学研究室

北海道医療大学口腔細菌学講座
馬 場 久 衛

北海道医療大学口腔細菌学教室は札幌から電車で30分余り離れた石狩平野の北端に位置しております。周囲は一面田園です。北海道医療大学歯学部は昭和53年4月に誕生しました。当初は東日本学園大学と称し薬学部と歯学部の2学部でした。現在はさらに看護学部と心理科学部の4学部になっております。歯学部の口腔細菌学講座の初代教授は秋貞泰輔教授で、出身は満州医大で九州歯科大学口腔細菌学教授より就任されました。研究のテーマは「*Candida albicans* の厚膜胞子に関する研究」で本真菌の厚膜胞子は生殖器官で無いことの証明に苦心されておられました。その下に助教授として就任したのが馬場久衛で、神奈川歯科大学より来ました。口腔の2大疾患はう蝕と歯周病であるが、う蝕原因菌といわれている *Streptococcus mutans* の產生する溶菌酵素をメインテーマとして研究していました。う蝕の無い歯の表面の常在レンサ球菌は *Streptococcus sanguis* であるが、歯垢が蓄積されると *S. mutans* に変わり、う蝕が発生しやすくなる。この変化の原因是 *S. mutans* の產生する bacteriocin やその場の酸化還元電位に対する対応など種々の原因が考えられますが、この *S. mutans* の產生する溶菌酵素もその一因ではないかとの証明に苦心している。その後、馬場助教授は現在教授に昇格しているが、その助教授として鎌口助教授がいます。氏は54年4月に東北薬科大学の大学院を修了して就任しました。

鎌口らは現在、歯周病の主原因細菌の1つとされている *Porphyromonas gingivalis* (以下 P. g と略します)が(1)どの様にして歯肉縁下のバイオフィルム(plaques)に参入し、また(2)バイオフィルム中で他の細菌とどの様に関係しているか、さらに(3)P. g の外膜や外膜と同様の成分である vesicle が種々の細胞に対してどの様な影響を与えるか等について検討しております。(1)については従来言われていた線毛による付着以外に P. g が既に歯肉溝に定着している細菌に P. g の菌体表層で結合(共凝集)することによりその目的を達成できることも可能であること(Microbiol. Immunol. 44, 649-656, 2001)。また、P. g の產生する vesicle は互いに共凝集できない菌間の橋渡しをすることをみました(Current Microbiology, 2003 in press)。P. g の菌体表層や vesicle の他の菌との結合に関与する成分を検索したところ、P. g の主病因子の1つとされる Rgp(Arginine specific cystein proteinase) のC末に存在する HGP17が関与することを明にしました(Microbiology, 149, 1257-1264, 2003)。この HGP17は proteinase 活性部位(Rgp A)、HGP44, HGP15, HGP27 等と外膜上で complex を形成して存在しているものと想定され、Rgp およびその複合体は歯肉縁下への P. g の参入にも関与していることを強く示唆しました。(2)については、P. g がバイオフィルム中で cell to cell コミュニケーションがあり、バイオフィルムの成熟に進んでいくのではないかとの観点より quorum sensing に注目しました。P. g の quorum sensing に関与する autoinducer 2 (AI2) が P. g のタンパク質発現に影響するかどうか AI2 の遺伝子の luxS 変異株を作製し検討したところ、Rgp A のタンパク質発現に影響している

ことが観察されました。現在、口腔内バイオフィルム形成菌より AI2産生菌をスクリーニングしており、口腔内バイオフィルム内における cell to cell コミュニケーションがバイオフィルムの成熟に関係するか、さらに検討を進めています。また、タンパク質発現の解析においては名大医学部の太田教授、東京農大の渡部教授、大山教授にご指導とご協力をしていただいています。(3)については、*P. g* は種々の因子が種々の細胞に作用しサイトカインを產生誘導および破壊という矛盾した作用が報告されており、また近年、細胞のシグナル伝達に影響する可能性も指摘されています。しかし、*P. g* の *in vivo* における細胞に対する作用については明確にされていない事柄が多くあると思われます。口腔内バイオフィルム中で増殖した *P. g* よりバイオフィルム外に遊離しやすいと想定される vesicle, 自己融解産物等が種々の細胞にどの様に影響するか明にしたいと考えています。細胞に対する影響の検討は札幌医科大学の藤井教授、北大歯学部の柴田教授に種々指導していただいています。これらのことより、口腔内のバイオフィルムの性状の一端を明確にし、歯周病の予防に寄与したいと考えています。

【研究室紹介】

北海道工業大学 福祉生体工学科

木 村 浩 一

私の在籍しております北海道工業大学は、各教官が独立して教育と研究を担当する体制のため、研究室のスタッフは助教授である私一人です。これに、4年生の学生が数名、ゼミ生として配属されており、卒業研究を行っています。私の所属は、工学部の福祉生体工学科というところで、一昨年に作られた新しい学科です。この学科では指定された科目を習得することにより、卒業時に臨床工学士国家試験の受験資格が与えられます。このため、工学部にもかかわらず医系の講義・実習がかなりあり、私の受け持ちだけでも、講義として医学概論、生理学、病理学、解剖学、さらに実験・実習として基礎医学実習、福祉生体工学実験、生体機能代行装置学実習、それに医用治療機器学実習があります。この他にも週最低1回以上の会議があり、正直なところ日中は殆ど研究が出来ません。本学では、研究よりも教育、教育よりも会議が優先されているので、年に数回しか実験室に入らないような教官もいるそうです。私は、実習が長引いて会議に出られないことがしばしばあり、学長と学科長に「問題教官」として何度も報告されています。幸い、どんなに「問題教官」となっても、昇進が出来ないくらいで、給与、賞与、研究費には一切影響ありません。そのため、講義も会議も一切せず、研究のみに没頭する「強者」の教官も全学で数名おります。私も研究を最優先としておりますので、学内では「準強者」の位置付けらしいです。教育の方は臨床工学士の国家試験にかかるので、さすがにサボる訳にもいかず、これが真の「強者」に成りきれない原因です。講義は工学部の強みを十分に活かし、多くをバーチャル講義としています。これは学生全員がノートパソコンを強制購入させられ、しかも講義室の全座席にインターネット情報端末が設置されていることで可能となりました。試験も各学生がノートパソコンから回答を入力すれば、点数が私のパソコンに記録されるので採点の手間が不要です。これらのシステムは、私ではなくゼミ配属された4年生の学生が作ってくれたものです。正確には「作ってくれた」のではなく「無理やり作らせた」ものです。このシステムのおかげで、私は他の教官から比べると講義の負担が随分軽くなりました。しかし、このバーチャル講義システムは、教官の熱意が伝わらない手抜き講義と見えるらしく、他の教官からは評判が悪くて、誰も私の後に続きません。しかし、分からぬ部分を何回も学習出来るので、学生の評判は大変良く、このシステムは大成功だと思っています。

私が本学に赴任したのは3年前で、専用の個室が与えられ、中には新品の机、椅子、ロッカーがあり、お茶セットまで用意されていたのには驚きました。ロッカーは大小2個あり、大きい方のロッカーを開けたら、中に掃除セットが入っていました。ただし、この時は研究室がなく、実験はまったく出来ませんでした。それまで在職していた札幌医大とは異なり、担当する講義・実習の多さに驚いて、この時ゼミ生となった4年生に、卒業研究としてバーチャル講義や試験集計システム作りを命じました。作製にあたっては、指導と言うより、「ああして」、「こうして」と単なる要求を出しただけでしたが、さすがに工学部の学生で、こちらの要求に対応したシステムを作り上げました。翌年、新学科の編成とともに研究室を

作ってもらいましたが、すでに「問題教官」として何度も学長に報告されているにもかかわらず、私の要求した実験機器は殆ど全て買ってくれました。ちょっと良心が疼きました。あまりに買い過ぎ、置き場所に困って、2年後の今も段ボールに入ったまま積み重なっている機械がいくつかあります。要らない物まで買ってしまったことに、かなり良心が痛みました。こうして自分専用の物のあふれた研究室が出来たので、1年間中断していた研究を再開しました。日中は実習とその準備で忙しく、夕方から研究室に入ります。その間は、ゼミ生が卒業研究として私の研究を行っています。私が研究室に入るのと入れ替わりに、彼らはクラブ活動やアルバイト、デートに出掛け、夜8時くらいになると、今度は「夜勤」のゼミ生がやって来ます。彼らにそれまでの結果を教え、これから実験方法を指示した後は、私が帰つてからも黙々と実験を続けています。夜半過ぎになると夕方出掛けたゼミ生の一部も戻つて来て、朝まで酒を飲みながら実験を行っています。酒代は私が出します。彼らは朝9時くらいに「日勤」のゼミ生と交代し、私が夕方研究室に入るまで「日勤」組が実験を継続しています。ゼミ生の若さを武器に24時間体制で動いている私の研究室ですが、4月、5月は、就職活動で大学にいない学生も多く、また、実験手技に習熟していない時期なので、私が彼らに指導する時間帯のみの、時短営業になります。また、12月と1月は卒業研究論文作成のため、ゼミ生は実験が殆ど出来ず、私も論文作成の指導をするので、実験は完全にストップします。2月、3月は春休みで講義も実習もなく、私も朝から夜までゼミ生と共に研究室に入り、12月と1月の遅れを取り戻すべく「炎の24時間」体制で実験します。酒代はこの時期ピークに達します。

当研究室では、ゼミ生の人数に合わせ、複数のテーマを研究しています。細菌学に関係するところでは、大腸菌O157の無毒化を目指す研究があります。これは一部の新聞でも紹介されたので、ご存じの方もいらっしゃるでしょうが、RNAi法の原理で、菌を殺さず無毒化のみを行おうというものです。菌を殺さなければ耐性菌も発生しないので、家畜の餌に混入して常時使用することが可能となり、予防に大きな力を發揮できます。また、この方法は、他の毒素産生菌にも応用出来る可能性も秘めています。現在のところ毒素産生は明らかに抑制出来ますが、実用化に必要な、さらに強力な抑制効果を得るための研究を続けています。他には、難病とされている、ある2つの自己免疫疾患で、細菌抗原による感作が原因との仮説があり、その抗原を探索しています。光触媒を使用し、太陽光のみで水を浄化しようとする工学部らしい研究もあります。実用化されれば、ビルの冷却塔水や噴水でのレジオネラの発生を抑制出来ます。ただし、担当している学生は、レジオネラより用水路やため池への応用を考えています。細菌学とは関係ありませんが、埼玉医大との共同研究で、アルツハイマー病を治療する細胞の開発を行っています。アルツハイマー病の原因である脳内に沈着したA β を貪食し除去する細胞を、遺伝子工学の手法を用いて作製しています。原理的には、そのまま牛海綿状脳症にも応用が可能です。現在のところ、*in vitro*では、ある程度A β の除去が可能な細胞が得られています。これらの研究の一部は、札幌医大からの継続ですが、その他はすべてこの2年間だけで行ったものです。私自身殆ど実験していないのに、ここまでやれるとは、ゼミ生の強力な若者パワーがあれば、不可能なんてあり得ないと錯覚してしまいそうな2年間でした。もっとも酒代は随分とかかり、私は貧乏になりました。

【職場紹介】

北海道の「家畜保健衛生所」

石狩家畜保健衛生所 病性鑑定課

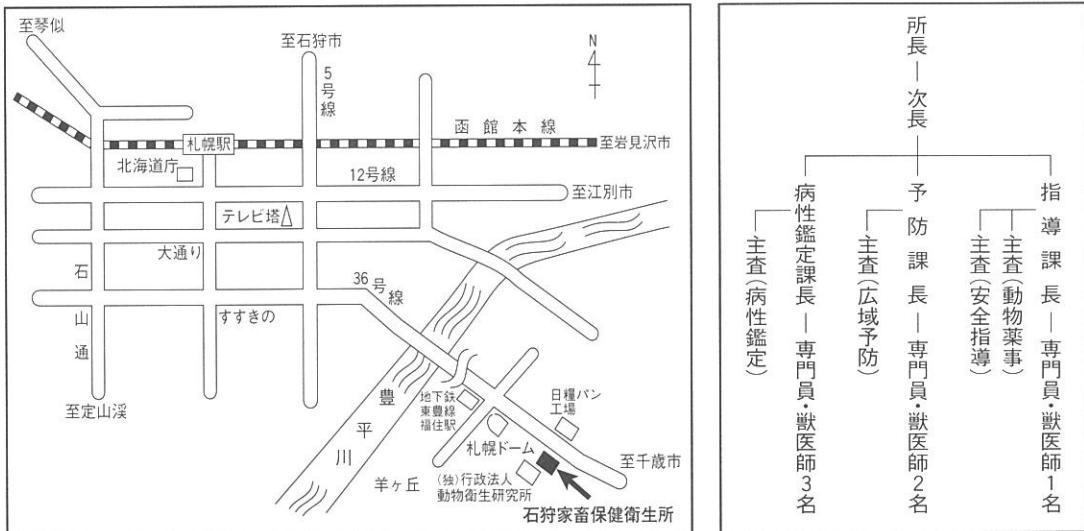
中岡祐司

北海道には現在、各支庁に1カ所ずつ14の家畜保健衛生所があります。昭和25年に制定された「家畜保健衛生所法」に基づき「北海道家畜保健衛生所条例」が制定され、これ以降、昭和38年までの13年間に各支庁ごとに2～5カ所、全道に41カ所の家畜保健衛生所が設置されました。

その後、家畜飼養頭数の変化（増加）、交通機関・手段（オートバイから自動車へ）や通信網の発達、家畜衛生技術の高度化などの情勢変化に対応するため、昭和40～44年に41カ所の家畜保健衛生所が再編整備され、1支庁1カ所、計14カ所となりました。

組織としては、家畜保健衛生所によって指導課、予防課、病性鑑定課からなる「3課制」(石狩、上川、網走、十勝)、指導課、予防課からなる「2課制」(空知、宗谷、日高、釧路、根室)、課制のない「次長制」(渡島、檜山、後志、留萌、胆振)の3種類の組織体制をとっています。

私が現在所属している「石狩家畜保健衛生所」は札幌市豊平区羊ヶ丘3番地、札幌ドームの横、国道36号線沿いにあり、現在の職員数は15名、指導課、予防課、病性鑑定課の3つの課からなり、それぞれの業務を連携しながら行っています。(下図は、石狩家保の位置図と組織図)



家畜保健衛生所の業務を簡単に紹介しますと、「家畜伝染病予防法」に基づく業務として、牛ブルセラ病・結核病検査、牛ヨーネ病検査、馬伝染性貧血検査、みつ蜂の腐そ病検査があります。今年、平成15年5月からは死亡牛のBSE検査を開始しました。

道内への伝染性疾病の侵入防止のために輸入・移入（道外からのもの）家畜の着地検査や、集団飼育施設である公共牧場（乳用牛、肉用牛）での定期健康診断も行っています。

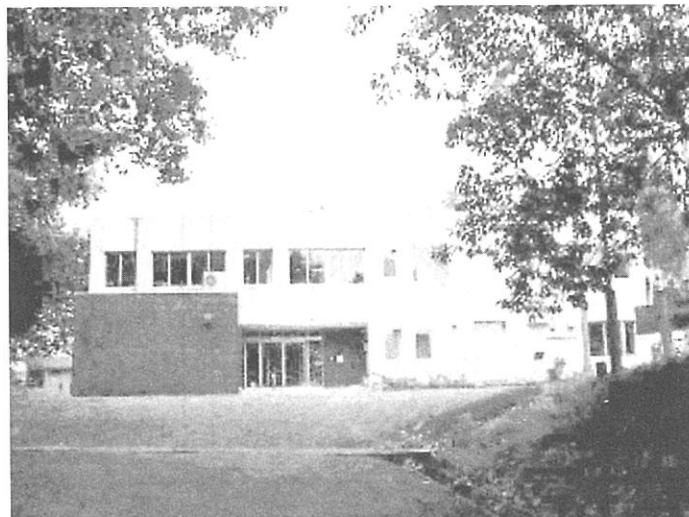
その他、生産性を阻害する慢性疾病やサルモネラ、大腸菌O157、クリプトスパリジウムなど人獣共通感染症の浸潤状況調査、HACCP方式導入による飼養管理方法の指導、動物用医薬品の適正使用の指導などをを行い、安全な畜産物の確保に努めています。

また、伝染病を疑う疾病や原因不明疾病的発生があった場合、臨床獣医師や生産者等からの依頼に基づき病性鑑定を実施しています。当所は、病性鑑定課のある基幹4家保（病性鑑定課のある家保は、他に、十勝、網走、上川家保）の1つで、道南地域の渡島、檜山、後志、胆振、日高家保では実施できない検査（ウイルス検査やPCR、微量要素分析など）等を行っています。

こうした中で成果のあった業務や調査、研究については、家畜保健衛生業績発表会や獣医学会等での発表を行っています。平成14年の業績発表会では17題の発表があり、当所からは平成14年は「サルモネラ血清型04:d:-による牛サルモネラ症の発生と対策」と「兎ウイルス性出血病」を発表しました。その他の主な発表としては、「ヨーネ病清浄化への取り組み」

（十勝）、「牛海綿状脳症発生に伴う防疫対策」（宗谷、釧路）、「公共牧場を中心とした牛ウイルス性下痢・粘膜病対策について」（網走）、「疫学調査と分離菌の遺伝子解析による牛ヨーネ病多発要因の検討」（留萌）、「黒毛和種飼養農家における牛ウイルス性下痢・粘膜病の発生と分離ウイルスの性状」（上川）、「馬鼻肺炎による流産・生後直死の実態と防除対策」（日高）がありました。

以上、細菌学的な内容とはちょっと離れていますが、北海道の家畜保健衛生所の概要について紹介してみました。平成15年5月から死亡牛のBSE検査を開始し業務量が増加していくと思われますが、私たちは家畜保健衛生所の従来からの業務はもちろん、調査・研究などについても鋭意努力していく所存ですので、今後ともよろしくお願ひします。



石狩家保

平成14年度 日本細菌学会北海道支部 活動記録

1. 日本細菌学会北海道支部学術集会

10月26日(土)

第70回日本細菌学会北海道支部学術総会（江別市）

会長：菊池直哉（酪農学園大学・獣医・獣医伝染病）

特別講演：家畜糞尿の嫌気的発酵による循環農法の追及

演者：岡本全弘 教授（酪農学園大学・酪農・家畜栄養）

座長：宮川栄一 教授（酪農学園大学・酪農・農業微生物）

一般演題：22題

2. 日本細菌学会北海道支部会報 第11号発行（6月）

掲載内容：第70回日本細菌学会北海道支部学術総会を迎えるにあたって

第69回日本細菌学会北海道支部学術総会を終えて

研究室紹介

平成13年度支部活動記録

平成13年度支部会計予算案

支部会則

支部会員名簿

平成14年度支部役員・名誉会員名簿

他

3. 日本細菌学会北海道支部評議員会・総会

10月26日(土) 評議員会に引き続き総会を開催

議題：1) 平成13年度会計決算報告

2) 平成14年度会計予算案

3) 平成15年度会計予算案

4) 平成15年度北海道支部学術総会長の選出

5) 次期北海道支部長の選出

6) その他

日本細菌学会北海道支部 平成15年度役員・名誉会員名簿

支 部 長：菊池 直哉（酪農学園大・獣医・獣医伝染病学）

評 議 員：石黒 直隆（帯広大・獣医公衆衛生）

磯貝 浩（札医大・医学・動物実験）

磯貝恵美子（北海道医療大・歯学・口腔衛生）

内田 郁夫（動物衛生研究所・北海道支所）

遠藤 賢裕（札医大・医学・微生物学）

大山 徹（東京農大・生物産業・食品科学・生物化学）

加茂 直樹（北大院・薬学）

齋藤 玲（札幌緑花会・緑ヶ丘療育園）

柴田健一郎（北大院・歯学・口腔病態）

白幡 敏一（帯広大・獣医獣医微生物）

杉本 千尋（帯広大・原虫病研究セ・先端予防治療学）

長野 秀樹（北海道立衛研）

馬場 久衛（北海道医療大・歯学・口腔細菌学）

藤井 暉弘（札医大・医学・微生物学）

藤田 晃三（札幌市衛研）

皆川 知紀（アンリージュナン会・新雨竜第一病院）

宮川 栄一（酪農学園大・酪農・酪農微生物学）

森 洋樹（北海道医療大・薬学・免疫微生物学）

山口 敬治（北海道立衛研）

吉田 哲憲（市立札幌病院・形成外科）

吉水 守（北大院・水産・微生物学）

幹 事：池田 徹也（北海道立衛研・食品科学）

遠藤菊太郎（札医大・医学・微生物学）

鎌口 有秀（北海道医療大・歯学・口腔細菌学）

小華和恵志（北大院・医学・細菌学）

高橋 樹史（酪農学園大・獣医・獣医伝染病学）

中岡 祐司（北海道石狩家保・予防課）

西森 敬（動物衛生研究所・北海道支所）

安田 元昭（北大院・歯学・口腔病態）

横田 伸一（札医大・医学・微生物学）

会計監事：砂川 紘之（元北海道立衛研）

松宮 英視（天使大学）

日本細菌学会（北海道支部関係）

理 事：藤井 暉弘

評 議 員：磯貝 浩 鎌口 有秀 柴田健一郎 藤井 暉弘 藤田 晃三

名 警 会 員：林 喬義 梁川 良

日本細菌学会 北海道支部 歴代支部長名

1.	昭和22~31	中村 豊	北大・医・細菌・教授北海道立衛研・所長
2.	32~33	根井外喜男	北大・低温研・医学部門・教授
3.	34~35	山田 守英	北大・医・細菌・教授
4.	36~37	平戸 勝七	北大・獣医・家畜衛生・教授
5.	38~39	植竹 久雄	札医大・医・微生物・教授
6.	39~42	高橋 義夫	北大・結核研・予防部門・教授
7.	43~44	三浦 四郎	北大・獣医・家畜伝染病・教授
8.	45~46	飯田 廣夫	北海道立衛研・副所長
9.	47~48	大原 達	北大・結核研・細菌部門・教授
10.	49~50	林 喬義	札医大・医・微生物・教授
11.	51~52	熊谷 満	北海道立衛研・疫学部長
12.	53~54	鈴木 武	北大・歯・口腔細菌・教授
13.	55~56	梁川 良	北大・獣医・家畜衛生・教授
14.	57~58	黒田 収子	北海道薬大・微生物・教授
15.	58(残任)	山本 健一	北大・免疫研・血清学部門・教授
16.	59~60	飯田 廣夫	北大・医・細菌・教授
17.	61	伊佐山康郎	家畜衛試・北海道支場・室長
18.	62~63	小熊 恵二	札医大・医・微生物・教授
19.	64~平成2	宮川 栄一	家畜衛試・北海道支場・室長
20.	平成3~6	皆川 知紀	北大・医・細菌・教授
21.	7~8	平棟 孝志	酪農学園大・獣医・獣医伝染病・教授
22.	9~10	中島 良徳	北海道薬大・微生物・教授
23.	11~12	渡邊 繼男	北大・歯・口腔細菌・教授
24.	13~14	藤田 晃三	札幌市衛研・所長
25.	15~	菊池 直哉	酪農学園大・獣医・獣医伝染病・教授

編集後記

北海道支部会報第12号をお届けいたします。

前支部長藤田先生のあとをうけて早5カ月が経過しました。その間、私の力不足により集談会などを開催する余裕もなくあつと言う間に時間が通りすぎていきました。この支部会報の発行が、支部長としての私の最初の仕事になりました。ご多忙の中、執筆していただいた諸先生には心から感謝申し上げます。会報の内容にご意見などがございましら、どしどしお寄せください。

函館、江別、そして今年は網走。支部学術総会は北海道の南から北へと縦断して開催されます。数多くの演題の発表を期待しております。

(菊池直哉)

069-8501 江別市文京台緑町582
酪農学園大学 獣医学部 獣医伝染病学教室
Tel: 011-388-4729
Fax: 011-387-5890
E-mail: nkikuchi@rakuno.ac.jp
